

## 第7回 今後の県立高校の在り方検討委員会 議事録

日 時 平成28年11月10日（木）

13:30～16:00

場 所 サンラポーむらくも 瑞雲の間

### 1 会長あいさつ

皆さん、こんにちは。すっかり寒くなってしまいました。きのうときょうを比べるとそんなに変わった気はしませんが、この会が始まったころと比べると随分気候は変わったと思います。

心理学の大変有名な理論の中に、人間の欲求には5つの階層性があるという、マズローの欲求の階層性という話があります。一番基本的な欲求は生理的な欲求で、これが満たされないと次の段階に進めないというものです。その次の段階が安全への欲求と言いますが、学生に説明するときに私がいつも言っているのは、安全への欲求というのは、あしたがきょうと変わらない、あしたがきょうと同じであるという、そういう仮定を持つとする欲求のことです。つまり、きょうはきのうと少し変わっているのだが、きょうもきのうと余り変わらない、きっとあしたもきょうと変わらないだろうと思いたいという、思いたい気持ちというのが安全への欲求というものです。私たちは、その安全への欲求があるので、本当は変化しているのに、変化していないように思いたい気持ちもどこかにございます。きのうの某国の選挙は、そういうことでいいのだろうかということちょっと思わせていただいたものかもしれません。選挙予測については、非常に先進国であるあの国において、ああいうことが起こるのだということ考えたときに、ひょっとすると私たちがつかんでいるデータというのは本当にデータと言えるものだろうかということも考えなければいけないのかもしれません。今後、子供たちが生きていく時代は、あしたがきょうと変わらないという前提で生きていっていいのだろうかということも含めて、私たちは、ある意味では少し大きな研究や勉強をしながらこの会を進めていかないと、子供たちに対する責任が持てないのかなということも、きのう、ちらっと考えた次第です。

限られた時間ではありますが、今後の私たちの委員会の進め方を含めて、きょうは議論いただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

### 2 議事

#### 【議題1 今後の進め方について】

〔資料1－1を肥後会長より説明〕

<意見交換>

○委員

肥後会長のお示しになられた最後の枠のところ、今後の島根県の高校教育の方向性というあたりについてある程度詰めておいて、個々のエリアへ進んでいくのがよいと思っている。今の段階で江津、浜田の方向性を決めてしまうと、県がこれから取り組もうとしている流れと一致するかどうか、そのあたりが少し見えていないところがあるので、会長の提案に賛成する。

○委員

先ほど会長から説明があったが、私もこの浜田、江津エリアに特化した議論をいつまで続けていくのだろうかという疑問があり、ここで一回整理することを提案しようと思っていた。この提案については非常に賛成している。

話を戻すようだが、浜田、江津エリアの現場の意見を聞かせていただき、本当に参考になった。その中で、わからなかったところが何点かある。一つは、浜田からの中高一貫教育の推進という提案について。人口の多い松江のような都市部においてはその選択肢として中高一貫教育は非常に有効ではないかと考えていたが、浜田などこれから比較的に人口が減少していく地域において中高一貫教育が本当に成り立つのかという素朴な疑問を持った。

二つ目は、江津工業とポリテクカレッジとの連携という話について。特色化のために非常に可能性のある取り組みだと思ったが、それが現実にできるのかと思った。

それと、江津と浜田に特化した話を聞いたわけだが、そのエリアだけに絞っていいのだろうか。都市部的なところや中山間地域でも、いろいろな事情があるので、もう少し広いエリアで考えてもいいのではないかと思った。工業、商業の話はしてきたが、では、農業はどうなのか、そう考えたときに、もう少し広い範囲で考えたほうがいいのではないかと思った。基本的には会長の考えに賛成である。

○委員

基本的な考え方は、資料1-1で会長が提案された内容に私も賛成である。

前回も言ったが、江津、浜田の問題はいろいろ地元から声が出ているということで、教育委員会としては大きな課題として抱えていると思うが、ここでこれ以上議論してもどうなのかというのが正直なところである。

大枠を話すときに、今の計画の中ではいわゆる県外生をどうするのか、中山間地域の学校をどうするのかということは出てきていなかったが、そういう問題が、隠岐島前高校だけの問題ではなく、他の中山間地域、離島の学校にもかかわるところで、平成31年度からの計画の中では大きな位置づけを占めるのではないかと考えている。

## ○委員

中高一貫教育、統廃合基準については、やはり江津、浜田で見るのではなく、石見全体、また、これからの島根県全体に対してかかってくる問題であると認識している。また、学科については、今の水産、商業といったくりが果たして子供たちにとって魅力的なのか、選択肢を広げるという学科編成になっているのか考えさせられた。

最後に、魅力化についても考えていく必要があると感じている。そのように考えたときに、今までの資料を見ると、今後の話をする上での検討課題にリンクする部分が多いので、島根県全体の高校教育の在り方についてまず議論するほうが大変スムーズに進むのではないかと感じている。

## ○安部副会長

このエリアの結論を全体の議論に先行させて得ることが可能か、私は不可能だと思っている。ただ、公聴会に参加させていただいたことは、石見地域の現状を知ることができ、非常に意味があったと思っている。できたら松江でも公聴会に近い形でいろいろな方から意見を聞くような機会があってもいいだろうし、それから、離島・中山間地の方を招いて、あるいは出向いて意見を聞くということにも発展できたらと思う。

ただ、県の教育委員会会議に、何らかのお返しをしなければならないとすると、会長にうまくまとめてもらっているのので、これに公聴会等で感じたのはこうだということを添えることは可能かと思う。これに加えて、各委員からいろいろな意見をもらっているのので、議事録をつけてお返しするというのも一区切りの具体的な形になると思う。

## ○肥後会長

浜田、江津のエリアについてどうするか、具体的な結論が得られればもちろんよかったが、それを急ぐよりは今後の島根県の高校教育の方向性について、大枠の議論をすることが大切だというご意見を大方いただいたので、そのような方向で進めさせていただきたいと思う。日程的なことについて多少難があるかもしれないが、その辺は事務局でロードマップを整理して、提案いただければと思う。

先ほど申し上げたように、高校教育をめぐって、ここから例えば10年間ぐらいどのような感じで国が動いていくのかについて、少し共有しておく必要がある。これまでデータも出したし、高大接続に関するデータもいただいた。8月26日に現状の学習指導要領の改訂に関するこれまでの審議のまとめが出ているので、これの高校教育にかかわるところを私なりに抜粋したので、この話を共有し、次回からの大がかりな議論をしてみてもどうかと思うので、おつき合いをいただきたい。

〔資料1－2を肥後会長より説明〕

今、紹介したところを含め、次回からどんな議論をするのか自由に意見をいただきたい。県教育委員会に岩本さんがいるので、魅力化の観点から、隠岐島前高校その他中山間地の高校で県外生を入れながら、どういう取り組みが進展しているのかについても紹介いただいたらどうかという話を先ほどいただいた。それもおもしろい取り組みだと思う。

ほかに、今後具体的にどういった角度から議論していけばいいのだろうかということについて、自由な意見をいただきたいと思う。また、皆さんからいただいた意見をもとに事務局と次回以降の議論の枠組み、資料、それからロードマップを詰めていきたいと思う。

○委員

肥後会長がきょう最初にお示しになられた資料の1の1の下のところ、今後の島根県の教育の方向性ということが書いてある。この学習指導要領の流れというのは、全国の流れについてのものであり、学習指導要領に基づいて島根県の高校教育、しまね教育ビジョン21に沿った形の高校をどのようにつくっていくかというところは、話を進めていかななくてはならないと思っている。

それから、11月1日に、しまね教育の日フォーラム2016が行われ、そのテーマが「島根で育む魅力ある島根の教育とは」であった。パネルディスカッションが行われる前の講演で、岩本さんが、なぜ魅力化かということについて幾つか話された。非常にいい話だった。これからの学校づくりは地方創生の鍵である。20年、40年後の世の中を本気で見据えたものが必要で、短期的に都会からヒト・カネ・モノを持ってくるということではなく、地域で自立できる人を育てることが長期的な地方創生に向けての鍵になるだろうということをお話していた。これまで離島・中山間地でやってこられた取り組み、特に隠岐島前高校の取り組みが全国的に注目されているが、魅力ある学びづくりを魅力ある人づくりにつなげ、魅力ある地域をつくっていこうと、そういったことを島根県全体に広げていくとよいのではないかと。離島・中山間地でやってきたことを全県へ、地域総がかりでやりましょう、これがキックオフですと、彼は高らかに宣言していた。このあたりが県教委の総意に基づく言葉だったかどうかはわからないが、これからの流れの一つの方向性かと私は思っている。

○委員

大枠の検討、テーマ、視点に関しては、異論はないと思うが、第1回の資料2の裏に参考として、検討課題例というのが出ていて、まさにこの内容が議論の対象ではないかと思う。

○肥後会長

議論の枠組み、論点整理、それから最初に提起いただいたこと、そこは決まっているのでそこ

に戻って議論するというだけでもいいと思うが、枠組みの中でも大事なテーマが幾つかあるので、そういうことは議論しなければいけない。例えば、今出たものの中でいえば魅力化という言葉に核に行ってきた実績があるので、そういったものを今後どう考えるのかということは一つの議論のポイントだと思う。これは、1つの高校の取り組みを中山間地に広げながら、コーディネーターを置いて取り組んでいるところ。県では地域教育推進室をつくり、研究をしているが、そういった取り組みを紹介いただきながら、全県的にどのように考えていくのかを議論することは、非常に大事な一つの論点だと思う。

それから、新学習指導要領の方向性の中で出てきた、「社会に開かれた教育課程」だとか、「カリキュラム・マネジメント」、「主体的、対話的で深い学び」といった言葉については、きょう、安部副会長に用意していただいた県教育長の寄稿にも少し取り上げられているので、紹介していただきたい。

#### ○安部副会長

これは昨日、私の手元に届いたもので、「校長会報」という島根県小学校長会が発行しているものである。これに県教育長が寄稿されているが、島根の教育について教育長がどういう考えなのか、どういうものを大事にしているのかということがコンパクトに整理してある。これに沿う必要はないかもしれないが、県教育長がどういうお考えなのか、情報として踏まえておくことは大事かと思い、資料を用意した。

#### ○委員

高校だけの問題ではないと思うが、我々、民間企業でいろいろな会社の事情などを聞いている中で、3年目の離職者が非常に大きな問題になっていて、身近なところだけではなく、全国いろいろなところで話していると、何か当たり前のように話が出てくる。今の学校教育とそのあたりがどう関連しているのかということも疑問に思ったが、そのあたりを食いとめるというか、そういう考えにならないような職業観を持った教育がもっとできないだろうか。キャリア教育などをされているので、そこでうまく循環していけばよいことだとは思いますが、今社会の中での現状というのはそういうことなので、そのあたりを食いとめるような教育が重要な問題だと思っていて、そういったところをもっと考えるべきではないかと思う。

それから、全体のこの流れだが、この委員会は平成31年から向こう10年間の議論をしているわけだが、今のその社会の流れというのが、3年あれば変わってしまうというような世の中である。例えばわかりやすいところでいえば、スマホなんて少し前に出てきたものだが、今や全員が持っているというような世の中に変ってきている。ということは、次の10年も、もっと変わっていくのだろうと思う。ある程度、その社会の流れに柔軟に対応するような、弾力性のある内容にし

ていかないと、こう決めたからずっとこれでやるのだといった枠にとらわれることのないような結果、結論というか、そういう方向性を導かなければならないと思っている。

#### ○委員

離職率のことも含めてだが、学校の成果を何で評価するかというあたりがなかなか難しい。よく言われているのは、先ほどの離職率、学習力、学力調査の点数、センター試験の点数、大学進学実績、島根県にどれだけ定着したかとか、もちろんそれぞれ意味があつて私はいいと思うが、数字になりやすいところはひとり歩きしたものが出てくる。では、どれが島根らしい指標なのかと問われたときに、教育として、例えば果たして島根県に残るのがいいことなのか。そのあたりは何か共通のものがあればよい。また、先ほど肥後会長が示された資料1の1によると、個々の能力をしっかりと開花させるという意味での評価、どこどこに合格するための評価ということと、定性的な評価、その子の伸びを実感させて、より伸びるような形に評価していくということで、2つのことが書かれていた。そのあたりは大きな問題かもしれないが、どこを見ていくのかというあたり、それでどうなったのかと聞かれたときに、捉えどころがなくなってくるのではないかと思う。

#### ○肥後会長

教育成果指標の問題はすごく重要で、数字になってしまうだけに非常に難しい面があるかと思う。大学もいつも大学教育の成果をどこで見るかと言われていて、一番高く出やすい満足度というものに取り組んだこともある。島根大学も満足度日本一を目指したことがあり、そのようなこともあるかと思う。この教育成果をどう捉えるかと同時に、個々の生徒の現状をどう捉えるかという、先ほど学習指導要領の改訂の中にも出てきた子供の個人内の強み、あるいは弱いところ、課題になるところ、それをどう捉えるかという、そういう評価の問題とも関係する。教育評価の問題というのは、たいへん大きなジャンルになるので難しいが、県が取り組んでいく高校教育の成果を、どのように把握していけばよいだろうかということを議論することによって、何が教育成果かということが、具体的なイメージとして上がってくる、そういう意味では非常に大事な論点だと思う。

#### ○委員

魅力化について、岩本さんの話というか、隠岐島前高校の先進的な事例を聞いてみたいという声も、先ほど出ていたが、それと同じように、中高一貫教育の現場の成果と、実際に取り組んでみられた課題とか、そういった現場での思いや、現状課題を伺える機会があるといいと感じている。それと同じように、都市部の高校での現在の入試についてとか、子供たちの学びの状態、そういったことも、高校教育の現場にいらっしゃる方の具体的な思いや声を聞いてみるというか、

教えていただけるようなことがあるといいと思っている。

先日、アクティブラーニングを取り入れている高校の先生の声テレビで聞くことができたが、そういった私たちが知らなかった学びの現場の成果というか、こういうことがいい、それからこういうことは難しいといったこと、やはり実際の声聞くというのはすごく腑に落ちるものがあった。そういったところから、島根の教育の中に落としていけるものもいろいろあるのではと思った。

#### ○委員

改めて、この委員会の設置要綱の第1条、目的及び設置のところに、社会の変化や生徒のニーズの多様化等に対応した高校教育の在り方、及び生徒数の減少等に対応した高校の在り方について検討するためと書かれている。過去のこの県立高校の再編成基本計画、平成11年から平成20年の計画には具体的な、いわゆる生徒数の減少に応じた、各高校の方向が書かれていた。現在の計画は、いわゆる定性的なものは書かれているが、具体的な数値は書かれていない。それは先ほども話があったように、世の中が大きく変わり、少子化の波はより強くなるから、場合によってはもっとドラスチックに対応しなければいけないという趣旨でそうなった。逆に言うと、平成11年から平成20年よりも、平成21年から現在のほうが、生徒数の減少に切実感があり、余りそれを出すと、特に該当する学校やその地域が大変になるということだった。そう考えれば、平成31年からのほうが、さらにその問題は深刻になるので、これは最終的には教育委員会が判断されることだと思うが、そういうことをこの場で検討するのかどうかというフレームを決めていただけたらと思う。

#### ○肥後会長

私は前回設置された委員会には参加していないが、この委員会自体の性質が、前回のときと同じなのか違うのかということも問題になろうかと思う。

この辺に関して意見のある方はいないか。

#### ○委員

学校の統廃合や規模などの話かと思うが、今まで小学校から中学校、中学校から高校になると、大体学校のサイズが大きくなり、たくさんの仲間と出会えるというイメージで高校の姿を思い描いていたのではないかと思う。大きいところで切磋琢磨して頑張る高校生の姿と、そうではなく、もう少し少数の中で課題を特化して頑張る、そういったこともイメージしてもよいのではないかと考えている。

そんな中で、島根県のこれからの高校の姿、そして統廃合の基準という言い方が適切かどうかわからないが、大きいサイズも小さいサイズもあるのだと考えてよいのか、いや、やはり高校生

が生活して力をつけていくにはある程度のサイズが要るのか。浜田で地域の方からいただいた声の中にも、やはり切磋琢磨という言葉がとてまたくさん出てきていて、数の中で磨き合って鍛えて、力をつけて欲しいということが、とても印象に残っている。高校のサイズが両方あってよいのかということも、確認できたらありがたいと思っている。

#### ○肥後会長

多分前回設置された検討委員会で議論していたときと、大分世の中の流れも違うということがある。ダウンサイジングをずっと続けていったら、この県はどうなるのだろうかという議論は当然あって、国でももちろん、そのことがあるから地域創生ということが、いわゆる消滅という言葉以来起こっている。その流れの中で、やはりダウンサイジングの基準を決めて、これ以上、お金を入れてもどうかということと統廃合していくというだけの意味の基準なら、それはあっても仕方がないという話になってきている。だから、この委員会でもし何か基準を置くとしても、それは、例えば、自分たちでこういう教育がやりたい、こういう子供を引き受けて、こう育てたいということに対する評価基準ということになる。要するに成果目標を決めて、その目標にどれぐらい到達しているかということで評価をしていくということがあって、評価によってやめたりやめなかったりするという話とはちょっと違うと思う。その教育成果をどのようにはかるのか、そのはかり方は、目標の立て方によるのであり、そういった意味で、小規模、大規模、さまざまなやり方があるのだろうと思われる。この委員会として学校の規模感をどうしていくのか、その辺は多分ぐるりと回って最後にやらなければいけないことの一つだろうと思う。それは、結局それぞれのサイズによって考え方はあるから、今回基準は決めませんという話になるかもしれない、それから、逆に、こういう目標を立てるのであれば、その目標が実現されたかどうかによって、やはりどうするかの基準は決めたほうがよいという話になるかもしれない。

#### ○委員

先ほどから、魅力化の話が出てきている。どうしても離島・中山間地域の計画ということになり、人数的にはそんなに変わらないのに、どうして都市部というだけで枠から外れてしまうのか。都市部においてもだんだん人口も減ってきているので、そういう枠を取っ払って考えてもよいのではと思ったのが1点。もう1点は、自分の進路希望があり、こういう学校に行きたいと思って進学できる子たちの話をずっとしていると思うが、島根県の小・中学校での不登校率はかなり全国的にも高かったと思う。県立高校に行きたくても行けない子が非常に多くいると思うので、そういう子のための在り方も少し考えていければうれしい。

#### ○肥後会長

一つは、従来からの慣習的な分け方として、都市部、中山間地という分け方があるが、質的な



違いがあるかといえば、そんなはないという考え方をすることもできるので、その辺をどう議論するかということがあろうかと思う。昔のまちという認識に基づいて、さまざまな学校が設置されているので、そのことが通用するかどうかということも、今後考えていかなければいけない。今の議論は、直ちに松江市内をどうするかという話に返っていく議論かと思う。松江市内といっても一様ではなく、地域によっては人口が減ってきている状況もある。

それから、もう一つは、中学時代に一定程度のつまずきやうまくいかなさを体験した子供たちがいて、その子供たちの、それでも高校教育、それからその先の教育に上手につないでいくような仕組みをもう少し柔軟につくらないと、不登校率が高いということよりも多分そういう子供はどこにでもいて、そのこともきちんと考えなければいけないということだと思う。中学から、いわゆる通常の授業になかなか落ちついて参加できずに、特別支援学校に進学する子供もいる。いわゆる特別支援学校も、従来の障がい児という考え方ではなく、発達障がいのあるお子さんも、さまざまに松江養護、出雲養護に通っている状況がある。特別支援学校を議論する場ではないが、特別支援のニーズがある子供たちをどうするか、これは今後高校教育の中で、高校の中に通級指導教室をつくるという流れもあるので、インクルーシブ教育の流れとあわせて、これも考えていかなければいけない論点だと思う。

#### ○委員

子供たちの選択肢を広げるためにも、現場の意見を多く聞く場を設けていただきたい。岩本さんから魅力化の話を実際に聞いて、身をもって感じていきたい。あと、島根ならではの考えたときに、地域特性だとか学校の特性みたいなものを、もう少し自分自身も皆様方に教えていただいて勉強していきたいと思っている。例えば、江津、浜田では、「ものづくり」が一つのキーワードとして出てきたと思うが、今後の時代を考えると、やはりこのエリアではグローバル化の対応に力を入れていったら、すごく魅力的な高校ができるのではないかと、そういったことについても学びを深めていきたい。そうしたことが子供たちを育てる高校教育の学科の組み直し、学科の在り方につながってくるのではないかと思う。また、高校教育の中で自分自身の経験、また子供たちの保護者として見ていて、進学校の中での文理選択は、とても大きなポイントだった。そこを一つ決めると、大学が決まって、就職が決まってしまう。一部ではあるかと思うが、文理選択、そこにあわせて高校大学の接続といったようなところについても学びを深めていきたい。

最後になるが、私も新卒者のフォローを職場で多少させていただいている。私の職場でいうと3カ月経過したときに、「少しいいですか」といった話が多い。3年というよりも大体3カ月、高校卒業者、短大卒業者、大学卒業者、大体みんな3カ月で、「私の進んでいる道、何か違うと思うのですよね、どうでしょう」という話がある。そこで向き合って話をすることで、「もう少し

しこういうふうにして深めてみます」とか、「頑張ってみます」と言うのだが、大体3カ月で言うてくるので、そこはやはり家庭での教育とか、学校での学びとか、そういったことも含めてすごく大事な部分だと感じている。その辺も一緒にお話できればありがたい。

○肥後会長

地域特性というものがあるのかという問題、それに加えて、地域ということかもしれないし、先ほど学習指導要領を確認したが、学校がそれぞれ特性を持つべきかもしれない。学校ごとの特性、同じ普通科と言っても、普通科で特性がなければ、学力の高い普通科と低い普通科があるというだけのことになってしまう。それでいいのかというような議論もあろうかと思う。文理選択の話が出てきたが、文理選択というのは、大変申しわけないことに、大学入試の仕組みからおりている話。高校生が早目に文理選択しないと、履修しなければいけない科目がたくさんあり、その教育が間に合わなくなるということがあって、文理選択は早まっている。その辺は多分、高大接続の一体的な改革の中で、少しは変わるはずだと思うが、履修の仕組みがどうなるのかという問題があろうかと思う。それから、グローバル化の問題も指摘いただいた。これも、それぞれの高校がどういう特色を押し出して、これがやりたいならうちに来てという言い方を各高校がしていかなければいけない。最近では県境を越えて魅力のある高校に移っていくという実態もあるようだ。各高校がそれぞれ置かれた地域の特性を把握しながら、ここに来たらこれがやれるということを、全国に発信するような仕組みをつくらなければいけない。それから、今までの枠組みを超えた工夫が今後はいると感じている。今、地域特性を踏まえてという話をされたので、今後そういう議論を入れながら、魅力化という言葉がよいかどうかわからないが、その高校の教育目標なり、これがやりたいならここに来て欲しいという言い方ができるかどうか、そのあたりが問われていると思う。

前回、中高一貫教育について質問が出たので、事務局で資料を準備していただいている。中高一貫教育の課題、あるいは効果について、最後に勉強して終わりにしたいと思う。事務局からの説明をお願いします。

〔資料2を事務局より説明〕

### 3 閉会挨拶（片寄教育監）

本日もさまざまな視点からご意見を頂戴できたと思っております。1つ、2つ、ちょっと振り返りますと、離職という言葉がございました。よくよく調べますと、県内の高校生、平均した離

職率と、各校種ごとに見た離職率には違いがある、そこら辺もひよっとしたら魅力ある学校づくり、あるいは幅広の選択肢の提供というようなところにつながるのかなと思いつながりながら聞かせていただいたところでもあります。

それから、新しい学習指導要領につきまして、さらにまた、この検討委員会の動向につきましては、県内の公立学校の校長は非常に強い関心を持っております。毎回その議事録をしっかりと読みながら、次期学習指導要領に向けた学校づくりをどのタイミングで、どういう方向で議論を始めるかというようなことを、現場の校長先生方は一生懸命悩み続けておられる、そういうような声も直接伺ったりしているところでございます。そういった意味で、今後の議論がこれから次の学習指導要領に向けた、各学校の新しい魅力化に向けた現状での取り組みに、大きな助けになるのではないかと期待しているところでございます。

今後も続きますが、委員の皆様方におかれましては、さまざまな立場からご意見を頂戴したいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。